

東京バッハ合唱団 月報

[第710号] 2021年8月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.710

August 2021

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

たのしく美しい人生に、感謝のみ

大村 恵美子 (主宰者)

私の家族6人(父母と兄妹4人)のうち、長女(恭子)、次女(私)、三女(淳子)の3人が生存中でしたが、去る6月4日、そのうちの淳子が85歳で病没し、長女(92歳)と次女の私・恵美子(90歳)の2人だけとなりました。

翌日さっそく淳子の遺体にお別れしようときめて、その時点で、私はこの月報用に文章を書いてみたのですが、合唱団主宰者とはいえ、あまり個人的なことを公表するのは、私物化ではないのかと反省して、いったんは引き下げました。

けれども、もう私自身にも、明日にもふりかかる問題ですし、いま「まったく健康」という医師のお墨付きがあっても、いつか一言もなくお別れすることも大いにあり得ると考えて、この8月号月報の紙面に、私個人から親しい友人たちへの手紙ということにして、長年の読者の方々にもお届けすることにしました。

正しいかどうかわかりませんが、その皆様方と、「親しい間柄の人々との別れの気持ち」を、共有させていただくことを、どうぞおゆるし下さいますように。

たのしく美しい人生に、感謝のみ

今日(2021年6月4日)、私の妹・渡邊淳子が他界しました。長年、共立女子大学の英文学教授をして、双子の息子たちを育てた、研究熱心でしかも心やさしい人柄でした。昨年最愛の夫・渡邊利雄(東京大学アメリカ文学部大学院教授)が病没し、がっくりしたこともあるのでは、と思います。

私達の実兄(鈴木祥司)は、スポーツ万能、快活な男らしい、頼りがいのある兄だったのに、早くも50歳で他界し、そして母(鈴木ハナヨ)は88歳で安らかに世を去りました。その後も姉・私・妹の三人娘は昔と同様に、毎年3月(私の)・6月(姉の)・10月(妹の)誕生日には、必ず3人揃って誕生祝いの昼食会を続けてきたのでした。残るのは今や認知症の姉・恭子(元団員、ドイツ演奏旅行にも一緒に行きました)だけとなり、その姉も夫の故郷・九州に永住してしまったので、顔を合わすこともありません。

これが老後の現実なのでしょうけれど、わが身の周りのこととなってみると、暗い諦めではなく、地上に生命を与えてくれた神が、一人一人、色々な生き方を経て、また手元に引き取って下さるのだ、と、感謝の心に満たされて、涙にかき暮れるよりも、深々と頭を下げる気持ちになります。

さきほど妹の息子の奥さんから知らせを受けて、私は、明日、東京郊外の自宅に戻る妹・淳子の遺体に、別れの訪問に行きます。彼女の85年間の生涯は、ずっと倅せなものだったようで、仲よし家族に恵まれ、私も安心して見ていました。

妹ですぐ思い出すのは、私が小学生の頃、3年続けて持ち上りの担任をされた、私の大好きな、若くハンサムな男性の先生も、妹を可愛がってくださいました。私の母も、長年学校の教師をしたせい、学校好きで、よく、小さい妹を連れては買い物帰りに学校の運動場を横切って行ったので、それが授業の間の休み時間だと、先生も窓から覗いて、「じゅーん子ちゃん」[レ(一)・ド・レ(ッ)]と、ふしを付けて明るく、優しく呼びかけてくださるのでした。

父が40歳の若さで病死してからも、母のお蔭で私たち4人の遺児は不自由なく成長して来られました。今でも、妹を思い浮かべるとすぐに、あの古市辰威先生の「じゅーん子ちゃん」という歌のような、呼ぶ声が聞こえてくるようで、ついほほ笑んでしまいます。どなたもみんな懐かしい面々。

人はこのようにお互いにいつでもやさしく呼びかけ合ってこそ、美しい人生を作り合い、交し合うのですね。

本当に、ありがとう、ありがとう。



■ 古代ハス (埼玉県行田市)、撮影:千葉光雄(団員)

月報 2021年8月号 CONTENTS

- ・ バッハ・カンタータの情景～コーラルカンタータ年巻…p. 2
- ・ 連載: 退屈するのはいそがしい [6] (大野博人) …p. 4

バッハ・カンタータの情景 №5

大村 健二 (団員)

コラール・カンタータ年巻から
三位一体節後日曜日、前半の情景 (2)

- ・BWV 93 《ただ主に拠り頼み》三位一体節後 第5日曜日
- ・BWV 113 《イエス 高き宝》同 第11日曜日
- ・BWV 78 《イエス わが心を》同 第14日曜日

【前回からつづく】

BWV 93 の各楽曲を観察しながら、バッハがこの連作で完成させようとしている「コラール・カンタータ」の構造を知ってみようと思います。

前号で掲げた【楽曲構成】を見てください(下に再掲)。

【楽曲構成】	訳詞冒頭句	コラール詩節の扱い方
1. 合唱	ただ 主に依りたのみ	第1節 (全6行そのまま)、4声各声部に定旋律
2. レチタティーヴォとコラール(B)	憂い われに甲斐なく	第2節 (4行引用、他は創作詞で書替え)
3. アリア(T)	十字架の時 いたらば	第3節 (2行引用、他は創作詞で書替え)
4. 二重唱アリアとコラール(S/A)	み神は 知りたもう	第4節 (全6行そのまま)、コラール定旋律は弦合奏
5. レチタティーヴォとコラール(T)	空 荒れくるい 猛り	第5節 (全6行を創作詞でつなぐ)
6. アリア(S)	主を仰ぎのぞみ	第6節 (引用は1行のみ、他は創作詞で敷衍)
7. コラール(合唱)	主に歌い 祈りて	第7節 (全6行そのまま)、Sに定旋律、単純4声体合唱

上掲表の右端は、「編成/調」のデータを、該当するコラール詩節の扱い方の一覧に改めました。ご覧のとおり、基本となるノイマルクのコラール〈ただ主に拠り頼み Wer nur den lieben Gott läßt walten〉自体が、もともと全7節からなっていたので、バッハはその順番どおりに楽曲を構成しました。すなわち、第1曲合唱の歌詞にはコラール第1節を、第2曲レチタティーヴォには第2節を、と順に対応させて、第7曲の終結コラールは、第7節(最終節)の歌詞で歌われます。

このときに、各節6行をそっくりそのまま歌詞とする場合(第1曲、第5曲、第7曲)と、コラール詩節からの引用は、6行のうちの4行(第2曲)だったり、2行(第3曲)だったり、1行のみ(第6曲)だったりまちまちですが、その引用部分を核にして言い換え、敷衍など、脚韻を織り込んだ自由な創作を施す場合などがあります。この創作部分の台本作者は知られていません。BWV 93 の出版譜をお持ちの方は巻末の対訳ページを、インターネット画面では上演用訳詞ページをご参照ください(【バッハ・カンタータ上演用訳詞】で検索)。訳詞の太字表記が、元のコラール歌詞の引用にあたります。

以上はBWV 93 のケースで、基本コラールの節数・行数・内容等の変化により、全節が使われるとは限りませんし、扱いは台本作者(作曲者との協働も含め)

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

の思いつき次第ですが、だいたいこの第2年巻のコラール・カンタータでの原則的なテキスト処理のモデルと考えていいでしょう。

各詩節のテキスト処理の先に、作曲家バッハによる教会暦主題を念頭に置いた、個性的な音楽創造が始まります。つぎの作品に移って、音楽づくりに触れてみたいと思います。

■カンタータ第113番《イエス 高き宝》

Herr Jesu Christ, du höchstes Gut BWV 113

【教会暦】三位一体節後第11日曜日(他にBWV 199、179)

【使徒書】1コリ15:1-10(復活のキリストと使徒パウロ)

【福音書】ルカ18:9-14(ファリサイ派の人と徴税人の譬え)

【成立】初演1724年8月20日(ライプツィヒ)

【歌詞】台本作者不詳。コラール・カンタータ。基本コラール:B.リングヴァルト Herr Jesu Christ, du höchstes Gut(イエス 高き宝)(1588)【BCH-52】。

第1,2,4,8曲は対応節の各全行、他の楽曲は、各残りの節の書替え。

【上演用訳詞】大村恵美子 <http://bachsmusik.starfree.jp/bwv113.htm>

【編成】独唱SATB、合唱、横型フルート、オーボエ2、オーボエダモーレ2、弦合奏、通奏低音

【楽曲構成】	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成/調
1. 合唱	イエス 高き宝 Herr Jesu Christ, du höchstes Gut	ob2, str., bc 口短調
2. コラール(A)	憐れみたまえや Erbarm dich mein in solcher Last	vn(ユニゾン), bc ヘ短調
3. アリア(B)	悪しき思い 起こり Fürwahr, wenn mir das kömmet ein	oba2, bc イ長調
4. コラールとレチタティーヴォ(B)	いやしの言葉 Jedoch dein heilsam Wort, das macht	bc
5. アリア(T)	イエス 受け入れたもう 罪人らをば Jesus nimmt die Sünder an	fltr, bc ニ長調
6. レチタティーヴォ(T)	主 受け入れたもう Der Heiland nimmt die Sünder an	str, bc
7. アリア二重唱(S/A)	ああ わが主 赦したまえ Ach Herr, mein Gott, vergib mir's doch	bc ホ短調
8. コラール(合唱)	み霊もて 強め Stärk mich mit deinem Freudengeist	tutti 口短調

(演奏時間 26分)

【上演履歴】2021 予定 (#120)

【日本語版楽譜発行】2020年、ISBN978-4-925234-85-6 (¥1800)

【録音】(なし、2020 現在)

二人が神殿に上がって祈った。ひとは自分は正しいと己惚れているファリサイ派の男で、「神様、自分はこの徴税人のような不正な者でないことを、感謝します」。いっぽうの徴税人は、<遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。「神様、罪人の私を憐れんでください」> (ルカ 18, 13)

この箇所説かれるイエスの言葉は「義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。誰でも、高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」(同 18, 14)です。この結論「高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」は別のカンタータの表題にもなっていて(BWV 47、ただし引用箇所は別、ルカ 14, 11。「50曲選」で既刊)、われわれも一度、定期公演で上演しました(2003年)。

しかし、今回のカンタータBWV 113では、「神様、罪人の私を憐れんでください」の叫びにこそ焦点が当たっています。リングヴァルトのコラール「イエス 高き宝」の冒頭節をそのまま引用した第1曲(4声部合

唱)の歌詞〈見よ痛みを負い/あえぐわが心/あまたの矢に刺され〉は、2本のオーボエの喘ぎの音型を背景にして、ロ短調の重い音楽をつくります。「私を憐れんでください」は、まさに、あの“ロ短調”の《ミサ曲》の〈キリエ・エレイソン〉とも言えるのです。

この作品で、バッハのコラール・カンタータはシリーズ第11作目に至っていますが、第2曲以下、基本コラールの歌詞を離れることなく、ところどころに定旋律を奏でながら、終曲の合唱コラールに到達するという構造は成熟に達しています。

第4曲の語り〈悩む心/苦き涙のあとに/輝く主の太陽を見ん〉(バス)を経て、つづくフルートの輝きの旋律をとまなうテノール・アリア(第5曲)に至れば、もはや不安の影も見えませぬ。終結コラールは、冒頭のロ短調に戻って、篤い信仰を、〈死の汗に洗え〉と歌詞鋭くも、淡々と歌います。

■カンタータ第78番《イエス わが心を》

Jesu, der du meine Seele BWV 78

[教会暦] 三位一体節後第14日曜日(他に BWV 25、17)

[使徒書] ガラ5、16-24(肉の業と霊の実)

[福音書] ルカ17、11-19(10人のらい病者の癒し)

[成立] 初演1724年9月10日、ライプツィヒ。再演・1730年代後半

[歌詞] 台本作者不詳。コラール・カンタータ。基本コラール: J. リスト Jesu, der du meine Seele 〈イエス わが心を〉(1641)【BCH-74】。第1、3、5、7曲は、それぞれ同コラールの第1、3a、4b、5b、10b、12節。第2、4、6曲はその他の詩節の書き替え。

[上演用訳詞] 大村恵美子 <http://bachsmusik.starfree.jp/bwv78.htm>

[編成] 独唱 SATB、合唱、ホルン、横型フルート、オーボエ2、弦合奏、通奏低音

[楽曲構成]	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成/調
1. 合唱	イエス わが心を Jesu, der du meine Seele	hn, fltr, ob2, str, bc ト短調
2. 二重唱(S/A)	急ぎゆかん 弱くともたゆまず Wir eilen mit schwachen	ヴァイオリン、bc 変ロ長超
3. レチタティーヴォ(T)	ああ われ 罪の子なり Ach! ich bin ein Kind der Sünden	bc
4. アリア(T)	罪をぬぐう なが血は Das Blut, so meine Schuld durchstreicht	fltr, bc ト短調
5. レチタティーヴォ(B)	み傷 いばら 葬り あざけり Die Wunden, Nägel, Kron und Grab	str, bc
6. アリア(B)	わが心をしずめ Nun du wirst mein Gewissen stillen	ob, str, bc ハ短調
7. コラール(合唱)	弱きわが心 強めたまえや Herr, ich glaube, hilf mir Schwachen	hn, fltr, ob2, str, bc ト短調

(演奏時間 21分)

[上演履歴] 1975 (#33)、1990 (#67)、1993 (#73、Ⅲ独)、2004 (#95)、2021 予定 (#120)

[日本語版楽譜発行] 2003年「50曲選」、ISBN978-4-925234-37-4 (¥1700)

[録音] CD「50曲選」Vol.11 (2004年録音、#95)

バッハ・カンタータの愛好家で、この曲を挙げない人はいないのではと思われるほどの名曲です。上表の上演履歴のとおり、われわれの合唱団も好んで取りあげてきました。

この日の福音書章句は、〈イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでくださ

一 小布施特別演奏会、中止のご案内

来たる8月7日(土)予定で、くり返しご案内してきた小布施公演(第3回)は、このたびの新型コロナウイルスの再拡大による東京の緊急事態宣言の発令(期間7/12-8/22)により、都・県境をまたがないでという要請が出され、ふたたび中止と決せざるを得なくなりました。

現地からもご期待をお寄せいただき、団員の意気も高まっていただけに残念でなりませんし、また、出演予定の方々には、ひきつづきの取り止めをお伝えせざるを得ず、心苦しいかぎりです。

ご準備くださった小布施町のみなさま、おぶせミュージアム・中島千波館のみなさま、および近郊のバッハファンのみなさま、コロナ終息のあかつきには、またぜひお招きください。今回予定したプログラムに負けない、いっそう充実したプログラムを用意してお伺いしたいと願っています。

東京バッハ合唱団

い」と言った〉(新共同訳、ルカ17、12-13)と始まる箇所です。前曲BWV113で取りあげた「徴税人」の祈りを思い出してください。当カンタータ第3曲レチタティーヴォの〈ああ/われ罪の子なり/いたく迷う〉の悲痛な叫びが重なります。[小海 基「<らい>、カンタータの中の差別語・問題語」(月報688号2019/10参照)]

何といっても、冒頭合唱の計算し尽くされた荘重な音楽構造が、まず聴く者の心をつかみます。重く病んだ足を引きずるような下降半音階のラメント・バス(嘆きの低音)のテーマが、通奏低音から管楽器へ、そして合唱のアルトからテノールへと引き継がれていって、ついにソプラノに、コラール定旋律が登場します。この流れが何度も循環して、歴史的な構築物ともいい得る堅固な芸術をつくり上げました。

イエス わが心を救い出したまいぬ

黄泉(よみ)の暗きより 重き悩みより
十字架の死をもて(コラール第1節)

しかしあえて、このカンタータの場面としては、この章句後段の、イエスの論しを信じて癒された男たちのなかの、ただひとりが「自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した」(同17、15)という場面を強調したいと思います。第2曲の、世にも軽快・明朗な女声二重唱。飛び跳ねながら、讃美を歌って戻ってくる様子が見えるようです

急ぎゆかん 弱くともたゆまず

おおイエス おお主よ ながもとの。

主は愛もて訪ねたもう、病める者、迷える者を

……(他詩節からの創作自由詩)

「大声で神を賛美しながら戻って来た」を、バッハが音楽に描くと、こうなったのでした。三十年戦争の悲惨のさなかのコラール作者ヨーハン・リスト(1607-67)の詞自体は、重い苦悩と激しい希求に満ちた内容ですが、この明るさは、改作した台本作者と、もちろん作曲者の手柄でしょう。つづく第3曲以下の楽章中で何度も耳にするコラール旋律を、最後は(第7曲)、単純な4声体合唱に包み込んで、曲を閉じます。

覚悟のほど？

安曇野閑人 大野 博人

「覚悟のほどがわかりました」

しばらく会っていない東京の友人に安曇野での様子を伝えたら、そんな返事が来た。彼は、私が首都圏と安曇野の二拠点生活を始めたことと勘違いしていたようだ。手紙のやりとりで、私が横浜の住まいを引き払って移住したのだと知って、ちょっと驚いたらしい。

彼の「覚悟」という言葉がひっかかった。都会を離れるのに「覚悟」なんてしなかった。首都圏で暮らし続ける選択の方が「覚悟」がいったと思う。

だって都会では、仕事でも買い物でもコンサートでも、出かけるには混雑した電車やバスに長時間揺られる「覚悟」が必要だ。すてきな音楽を聴いても、帰宅するのに満員電車を「覚悟」しなければならない。出かけるときから気持ちが萎える。

かといって車で出かければ、渋滞や高い駐車場代を「覚悟」せざるをえない。都心に住むにはもっと大きな出費への「覚悟」を迫られる。

かつてパリ支局での駐在を終えて帰国するとき、フランス人の友人に愚痴った。

「今度の東京の職場に行くには、横浜の自宅からバスと電車を乗り継いで片道1時間半かかる。通勤中は立ちっぱなしになることも多いんだ」

彼女の反応に虚を突かれた。

「だったら、家の近くの会社に転職すれば」

深くうなずきながら、結局私は定年まで同じ会社に勤め続けたけれど……。

首都の憂鬱は通勤だけではない。今後30年以内に起きる可能性が70%以上とも言われる、直下型大地震への「覚悟」もある。それに、コロナ禍は大都市が感染症に対してもどれほど脆弱かあからさまにした。ちょっと動くにも感染リスクを「覚悟」しなければならない。コロナ禍がなくても、都会で病院に行くときは長時間の順番待ちを「覚悟」のうえだろう。

都会での生活は「覚悟」だらけ。

安曇野での暮らしにそんな「覚悟」はいらない。地震はどこでも起きる。しかし、ここなら高層マンションのエレベーターが止まる心配はない。だって高層マンションなどないのだから。道路の渋滞も通勤電車のラッシュも、首都圏に比べればかわいいものである。駐車場も安曇野市内はほとんどが無料。

コンサートに行くのもめんどろではない。来月、となりの松本市で予定されているバッハの室内楽の演奏会に出かける。

自宅から会場まで車で行けば30分ほど。道路の左右には田畑が広がる。途中、渋滞は考えられない。

コロナ禍は長野県にも及んでいるけれど、安曇野で

は「三密」の場所を探す方がむずかしいくらい。都会ほどの緊張感はない。

安曇野に家を持ったばかりのころ、散歩で通りがかった老夫婦に声をかけられた。

「私も10年以上前に横浜から移住したんですが、ここは暮らしやすいですよ」

かなりのご高齢だったので、医療環境に不安はないかきいてみた。

「全然。1日に3つくらい病院を回るけど、どこでも待たされることはないよ」

長生きできそうな気がした。

とはいえ、田舎暮らしにもそれなりの「覚悟」は必要かもしれない。

これまでにご報告したとおり、いくらか不便を忍ぶという「覚悟」、サルにうつつうしい思いをさせられるという「覚悟」……。最近、安曇野市から毎日のように「熊の目撃情報」というメールが届く。たとえばこんな具合。

「安曇野市耕地林務課から、熊の目撃情報についてお知らせします。7月12日、午前7時10分頃、穂高有明地域旧アートヒルズ西側付近で、成獣の熊1頭の目撃情報がありました。▼外出される際はラジオ・鈴など音の出るものを携帯し、十分注意してください。▼熊を目撃された場合は、耕地林務課までご連絡ください」

うちから2キロくらいしか離れていない。熊との遭遇も「覚悟」しなければならないようだ。最近の熊は人間社会の騒音に慣れていて、鈴くらいで退散しないともいう。

いやいや大丈夫だ。チェロがある。窓を開けてチェロの練習をすればいいだけだ。私の弾くチェロの音には「聞くに堪えない」という大きな利点がある。

うちの回りをうろつく熊には、それなりの「覚悟」が求められる。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



近所の公園わきの標識(写真も筆者)